オセアニアにおけるBeachcombers

豊田由貴夫（立教大学アジア地域研究所副所長、観光学部教授）

弘末：続きまして、豊田先生のご報告に入らせていただきます。「オセアニアにおけるBeachcombers」という題目です。豊田先生はオセアニアの文化人類学のご専門でありますけれども、本日はやや無理を申しまして、「海域世界と社会統合」というテーマに入っていただけるような、こういうタイトルでのご報告をいただくことになりました。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

豊田：よろしくお願いいたします。「オセアニアにおけるBeachcombers」というタイトルでお話させていただきます。**写真１**はたまたまロンドンで撮った写真なのですけれども、Beachcombers（以下ビーチコーマー）という単語、用語が持っている雰囲気をよく伝えているかと思いまして、ここにお示ししました。多少アウトローな雰囲気というか、ならず者とかいうような表現をされる場合がありますけれども、そういうことからこの写真のようにカクテルバーの名前に使われる雰囲気を持っているということで、ここで紹介させていただきました。

写真１　THE BEACHCOMBER COCKTAIL BAR
著者撮影

研究発表の目的

今日の発表の目的となりますけれども、1つはビーチコーマーの概略の紹介ということになります。それから、ビーチコーマーの歴史過程の考察ですね。そして、ビーチコーマーの世界史的な意味、これはビーチコーマーをめぐる世界史的な背景ということになるかと思います。それから、もう1つは今日の全体的なテーマに関連するように、現地の社会統合に果たした役割ということでお話させていただきます。

ビーチコーマーの定義

最初に歴史をやっている方はだいたいご存じではないかと思うのですけれども、一応このあとのお話の確認のためにビーチコーマーの定義のようなものを**資料１**で出しておきました。

これはポリネシアの歴史事典の項目から取ったものですけれども、時代は18世紀後半から19世紀初頭で、組織的、集中的な植民地化が起こる前ですね。このビーチコーマーが活躍した時代のあとに組織的、集中的な植民地化が行われますが、その前に島々に居住した非オセアニア出自つまり在来住民ではない人たちということになりますが、基本的には

資料１　Beachcomberの定義

太平洋地域において、18世紀後半から19世紀初頭に、組織的、集中的な植民地化が起こる前に、島々に居住した非オセアニア出自の人々。ポリネシアは、気候、人々の友好的態度、島嶼部を訪れる船舶の多さから、彼らにとって特に魅力的な地域だった。Beachcombersの多くは、捕鯨船や交易船からの脱走者であり、遭難者もこれに加わる（Craig, 2011）。

ヨーロッパ系の人たちということです。特にあとでお話ししますけれども、当該の地域の中ではポリネシアに多いのですが、ポリネシアは気候とか人々の友好的態度、それから島嶼部を訪れる船舶の多さなどから、こういうビーチコーマーにとっては特に魅力的な地域になっていました。ポリネシアはビーチコーマーが活躍した、あるいは他の地域と比べて数が多くいた地域であるということです。そして、ビーチコーマーの多くは捕鯨船や交易船からの脱走者であり、遭難者もこれに加わるということになります。このへんはあとでもう一度多少詳しくお話できるかと思います。

ビーチコーマーの特徴

ビーチコーマーの特徴ということになりますけれども、1つは西洋社会からの隔絶です。船が遭難したり、あるいは置き去りにされたり、あるいは脱走したりということになりますので、それまで自分が所属していた西洋社会から隔絶されるということが1つの特徴になります。それからもう1つは散発的ということです。散発的というのは組織的ではないということです。そのあとに居住するようになるヨーロッパ系の人たちというのはまず宣教師、ミッショナリーですね。それに加えて植民地政府の関係者あるいは交易をする人たちになりますけれども、そういう人たちがある程度組織的に移住して来たのに対して、ビーチコーマーの場合は散発的に移住が行われたということです。これがもう1つの特徴になるかと思います。

それから、西洋社会からは隔絶されますので、それは逆にいうと現地社会に統合されるという特徴があります。生活の基盤というものはもう西洋社会から隔絶されますので、生活を現地社会に依存するようになるというのが、もう1つの大きな特徴と言っていいかと思います。

最初にオセアニア地域の説明を簡単にしておきたいと思います。**図１**は太平洋地域の地図ですけれども、それを言語で分けた区分です。言語は文化的なものの指標になりますので、とりあえず言語地図で示しましたけれども、この部分がポリネシアです。ポリネシア

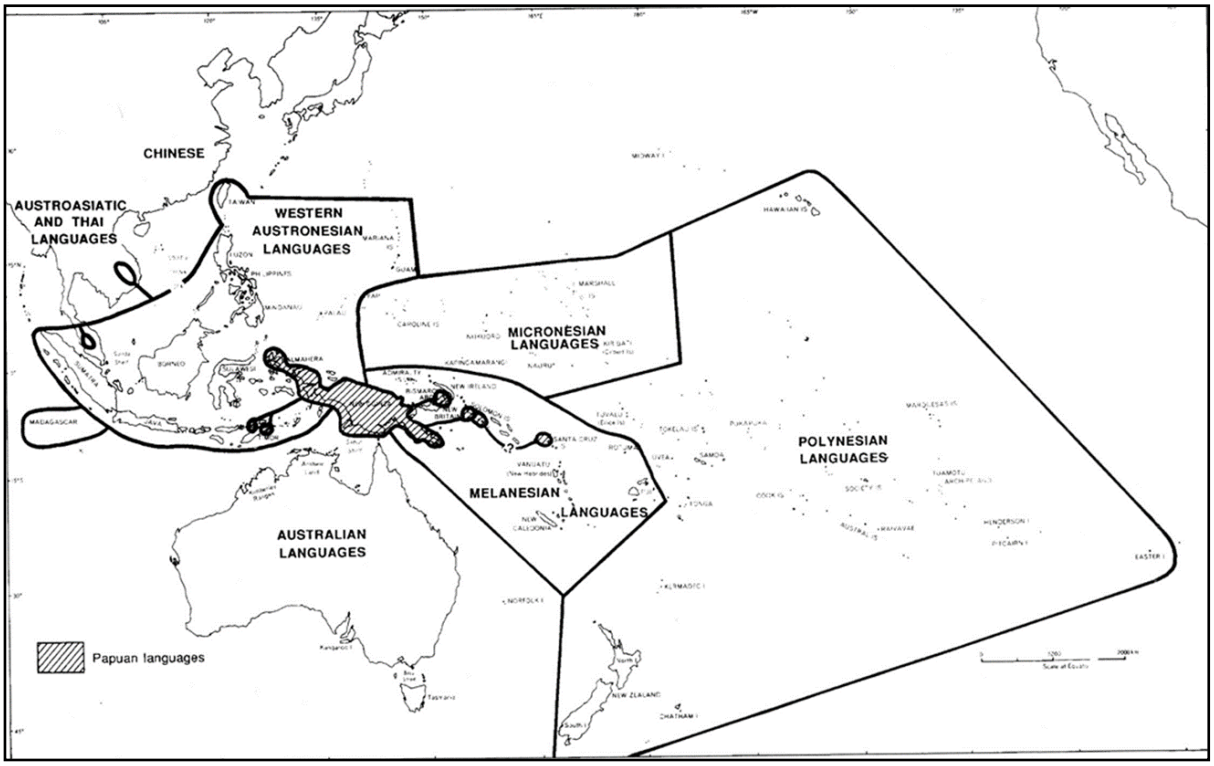

図１　オセアニアの言語区分地図／Quanchi & Adams 1993より

は大きな三角形の内部の地域と言われていまして、これがハワイとイースター島とそれからニュージーランドを頂点とする三角形です。ここにあるたくさんの島々（ポリネシア）ということになります。今日の話にはミクロネシアが出て来ますけれども、小さな島々という意味のミクロネシアがこの地域です。それから、今日の話にはあまり出てきませんが、この地域が黒い島々という意味のメラネシアです。また言語地図ではこちらの東南アジアの島嶼部の大部分がオーストロネシア語族ということになりますけれども、もっと西のほうに行きますとマダガスカルまで続いています。ニューギニア島の内部とその周辺は、パプア諸語ということで別になりますが、今日のお話はだいたいポリネシアとそれからミクロネシアが中心になるかと思います。そのために今日の話に関係する部分のだいたいの概略を地図で示しておきました。

初期のビーチコーマー

ビーチコーマーの初期の事例というのはどういうものがあるかということですけれども、記録に残っている中でおそらく最も古いものとしては、マゼランの航海中の例があります。航海中の1521年に北マリアナ諸島に船員1名を置き去りにしたという記述が残っています。それから、1566年にサン・ジェロニモ号という船の中で反乱が起こりまして、その反乱を起こした28人というのがマーシャル諸島、これもミクロネシアですが、このマーシャル諸島に置き去りにされたという記録も残っています。それから、1565年から19世紀初頭にガレオン貿易というのがありますけれども、この結果何人かの人たちがビーチコーマーとなったというように言われています。具体的な記述では1684年に7人がカロリン諸島（ミクロネシア）にビーチコーマーとして居住していたという記述が残っています。

ビーチコーマーの時代

それでは少しビーチコーマーの時代を歴史的に追ってみます。1788年にイギリスがポート・ジャクソン（現在のシドニーです）に植民地を建設しまして、このポート・ジャクソンが太平洋地域の捕鯨船や交易の基地となります。当時交易の対象となっていたものはタヒチのブタとかフィジー、マルケサス諸島の白檀です。この白檀はサンダルウッドと呼ばれているものです。トゥアモトゥの真珠貝とかナマコとか、それに今日の太田先生に話してもらったと思うのですけれども、鼈甲などが交易の対象になっていました。

そしてもう1つ、ビーチコーマーが関連するのは、ポート・ジャクソンにイギリスから囚人が連れて来られましたので、この囚人が捕鯨船や交易船の船員として雇われたという背景です。言い方としては難しいのですが、ポート・ジャクソンに連れて来られた囚人がこういう船員たちの供給源の1つになっていて、最終的にはこのような人たちがビーチコーマーになったということになります。ですから最初に示したようなビーチコーマーのアウトロー的な性格というのでしょうか、ならず者とか言われたりするような性格は、このへんから来ていると考えてもいいだろうということです。

ハワイの場合

いくつか事例を追って紹介したいと思います。最初はハワイの場合です。これはアメリカと中国の間で航海が頻繁にされていたと言われていますけれども、その途中で1790年までにハワイに10人のビーチコーマーがいたという記述が残っています。それから、当時のハワイのカメハメハ王がほかの島と競合関係にありましたので、カメハメハ王がほかの島を征服するためにこのビーチコーマーの重要性を認識して積極的に使おうとしたということがあるようです。1794年までにはカメハメハ王のもとに11人のビーチコーマーがいたとされています。それから、ハワイのほかの島でも同様にビーチコーマーが活躍したと言われています。1804年になりますとハワイのホノルルがビーチコーマーの中心となります。1806年にはオアフ島で92の白人がいたという記述が残っています。

あとでももう一度触れますけれども、これまでのお話、だいたい東南アジアのお話と比べますとオセアニアのビーチコーマーは人数が非常に少ないです。先ほどの弘末先生の東南アジアの話でもだいたい何万人とかという数字が出ていますけれども、ビーチコーマーという場合は、もともと散発的だということもありまして、人数が少ないです。ただ、それを迎える現地の社会の規模もそれほど大きいものではありません。例えば太平洋の島ではだいたい数万人規模の島というのがほとんどで、10万超える島というのはあまりありません。あとで出て来ますタヒチでも10万ちょっとぐらいでしょうか。それから、ハワイですと今はだいたい100万人ぐらいいるのですが、昔ははるかに少なかったです。そういうことになりますと、もともとのこれらのビーチコーマーを受け入れる社会というのは、それほど規模は大きくありませんので、東南アジアと比べると太平洋地域で外からやってきた人の人数は非常に少ないのですが、相対的な数という点ではそれだけの影響を与えたと考えていいかと思います。

タヒチの場合

タヒチの場合ですと1800年代の初期にオーストラリアはタヒチと豚肉の交易をしています。豚肉を求めて交易の船がタヒチに向かっていたということです。そうして1806年には約100人の白人がいたという記述が残っています。記述としては主としてイギリスの囚人だというような表現がされています。そのあとでタヒチの場合ですと、ほかの地域も多少時代がずれますが、1820年頃からは宣教師団、いわゆるキリスト教のミッショナリーが来ますので、これらの人々が居住するようになるとビーチコーマーは少なくなるということがほかの地域と同様に起こります。

南太平洋の他の地域の事例

ほかの地域の事例をざっと紹介いたします。フィジーですと1811年までに20人のビーチコーマーがいたとされています。サモアでも1830年に25人の白人がいたという記述が残っています。ロトゥマはポリネシアですが、1830年代に捕鯨船の寄港地となって白人の人口が約70人となったということです。ポナペでは1835年に25人の白人がいたという記述が残っています。これがそのあと捕鯨船の寄港地として使われるようになって1850年には約150人いたということです。それからナウルはミクロネシアですが、1841年に20人の白人がいたという記述が残っています。だいたいこういう地域が、ビーチコーマーが居住していた地域というわけです。一方メラネシアはオーストラリアに位置が近いにも関わらず、ビーチコーマーはほとんどいなかったとされています。これについてはあとでもう一度触れたいと思います。

現地の社会の対応

そしてビーチコーマーに対する現地の社会の対応です。ポリネシア、ミクロネシアは伝統的に外からの人に対して寛容であるということが言われています。このへんもビーチコーマーを受け入れる状況だったのだろうというわけです。そして、先ほどのハワイの事例で説明しましたけれども、ほかの社会との競合が絶えずありました。競合が恒常的にあり、ハワイですと1つの島の王やチーフ（首長）がほかの島の王やチーフと対立していて、ほかの島と戦争をするという状況がありました。こういう状況から王とかチーフはヨーロッパの武器とか航海術に関心を持ったというわけです。そして、王やチーフは、ビーチコーマーが有益だと判断すると、住居を与えたり家を与えたり、そして自分の親族の女性を妻として差し出すという、表現が非常に難しいですけれども、こういうことも行われていたということです。

ビーチコーマーの対応

一方のビーチコーマーの対応ということになります。先ほどもお伝えしましたけれども、西洋社会とは隔絶されますので生活が基本的には現地社会に依存するということになります。食べ物、土地を与えられて家も建ててもらう、あるいは自分で建てるということになります。しばしば島の女性と結婚して子どもを持つということが行われました。そして、現地の王や首長から有益と判断された場合は、その親族の女性が妻となって現地の社会体制に組み込まれる場合もありました。その場合には、現地の中の社会的な地位を与えられるという場合もあったようです。それから、現地の衣装や習慣も受け入れて、伝統的にポリネシア社会では入れ墨とかありますけれども、この入れ墨も受け入れて自らに施すというようなことも行っていたということです。

なぜビーチコーマーとなるのか？

次はどうしてビーチコーマーというものになるのかという問題です。原因としては、1つは船が遭難した結果、漂流して近くの島にたどり着いて、そこで仕方なく暮らすということがありました。それから、もう1つは少し事例も紹介しましたけれども、航海中に不正なことをしてその懲罰として置き去りにされると、こういうこともあったようです。このへんは本人の意思とは別に仕方なくということになるのですが、一方で本人が自らの意思で、例えば船から脱走するという場合もありました。交易船や捕鯨船では非常に長い船上生活になるので、それに耐えかねてということになるのだと思います。長く厳しい船上生活から逃避して自ら島に逃げるということです。それから、船員として雇われていた人は、オーストラリアで暮らしていたわけですけれども、そのオーストラリアでの暮らしからは、おそらく太平洋の島での暮らしというのは魅力的に映っていたのではないかということも言われています。

最盛期のビーチコーマーの数

一番多い頃のビーチコーマーの数というのを地域別に見てみます。ハワイが1806年に約100人です。それからタヒチが1806年に100人。これはいくらか誇張があるのではないかと言われています。フィジーが1811年までに20人です。サモアで1830年に25人、ロトゥマで1830年代に約70人いたという記録があります。ポナペですと1850年に約150人いたという記録が残っています。先ほども言いましたけれども、東南アジアと比べると2桁ぐらい人数は違うのですけれども、受け入れの島自体の人口がそれほど大きいわけでありません。島の人口は数万とかあるいは数千という場合がほとんどですので、これでも相対的にはかなりの影響があったと考えていいだろうと言われています。

それから、港のような形で使われている場所というところに人口が集中しているわけではありませんので、平均的に居住していたある地域が港としてふさわしいので、そこに白人が来るようになったということですので、人口が集中している地域というのはそれほどあるわけではありません。こういう所では100人とかという数字も数十人という数字も、現地の社会で相対的な割合としては大きく、ある程度の影響を与えたと考えていいだろうということです。

島民に対するビーチコーマーの影響、役割

それでは島民に対してビーチコーマーがどのような影響を与えたかという問題です。いくつかあったようです。１つは珍しい存在として、初期の頃は特にそうです。それから、技術を持った人。それから戦闘の協力者。それから西洋社会との仲介者という性格があるかと思われます。それぞれ順番に説明します。

初期の段階では、ビーチコーマーはいわゆる白人ですので、王とか首長が珍しいものと

して色々なところに連れて行く、連れ回すということが行われていたようです。

それから、一方技術者としても珍重されました。太平洋地域は伝統的には鉄器などの金属器がない社会ですので、そういう社会では金属器や鉄器というものは非常に重要視されたということがあります。ですから、そういう道具を持っている、あるいはそういう道具を保守、修理できるという技術は、現地では重要視されたわけです。銃やピストル、斧、ナイフとか鋤、はさみ、カミソリ、このへんのものをビーチコーマーがある程度持ち込んだり、あるいはそのあとに来る船からそういうものを得たりするということで、ある程度の数を持っていたことから、現地の王や首長に有益だと判断されました。

それから、航海術などに関しても伝統的な太平洋の航海術に比べて大きい船がつくれるとか、そしてそれを修理する技術があるということで、これもほかの社会と戦闘する際に有益と判断されました。技術があるので戦闘において協力者として評価されたということになります。銃を持っていたり、それを使用する技術があるので、それをある程度そろえて現地の人たちに使い方を指導したり、あるいは保守、整備をする技術、それから先ほど伝えましたけれども、航海術や船の建造、修理の技術などが珍重されて戦闘に協力するということが行われたようです。

それからもう1つは、仲介者の役割ということになります。現地の事情に詳しいということがあります。長期間滞在しているので、しばしば現地の言語を修得している場合もあります。現地の社会とそれから西洋社会との仲介者として、通訳をしたり案内したりということで評価されていたことになります。謝礼として西洋社会からは物品を受け取って、そしてそれをまた現地の社会で交換して何かを得たりしていました。首長からは土地とか住居、妻など、このへん表現がちょっと難しいですけれども、女性を妻として受け入れたと、こういうことが行われたようです。

政治的影響力

政治的な影響としまして、ビーチコーマーが持ち込んだ銃器というものを現地の社会が利用することによって、首長同士の争いに大きな影響を与えたと言われています。特にハワイとかタヒチなどで現地の社会でかなり統合が進みましたけれども、その際にビーチコーマーが持ち込んだ武器というものがかなり影響を与えたのではないかということが言われています。そういう意味ではビーチコーマーを利用できる王や首長が政治的な競合で、ほかの社会との競合では優位となったというわけです。

当時の状況を模式図のように表した地図がありますので、載せておきました（**図２**）。これは比較的ビーチコーマーが活躍した初期の段階で、交易者が島の社会に行って交易品を持ち帰って、その交易品の多くが中国に行ったというような説明になります。

ビーチコーマーのその後

そして、ビーチコーマーのその後ということになります。19世紀頃からそれまでは散発的にしかヨーロッパ社会の人たちが入って来ませんでしたけれども、19世紀頃から組織的にヨーロッパ系の人たちが入るようになります。宣教師団とか植民地の関係者、あるいは交易に従事する人たちです。こういうことになりましてビーチコーマーにとっては居住の条件が悪くなったり活躍の場が少なくなったりするということで数が減って来たのだろうということが言われています。

図３はその後の社会の模式図ということになります。もう少し時期があとに下りますと交易が大規模になったり、プランテーションなどができたりして、交易が大規模になって組織的に行われることによってビーチコーマーの活躍の場はなくなってくることになります。

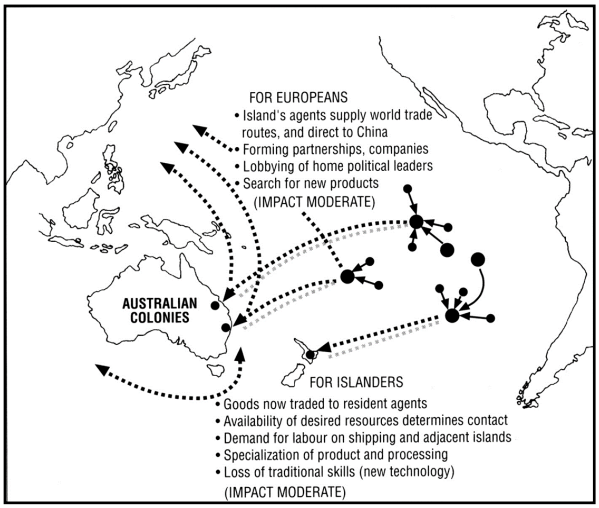

図２　初期Beachcombersの交易

Quanchi & Adams 1993より

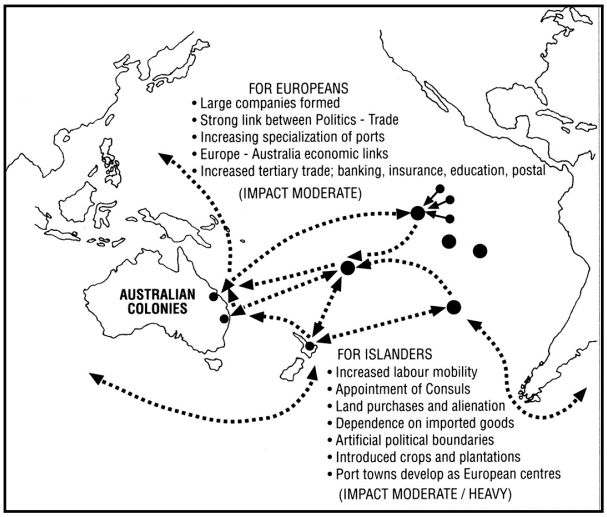

図３　19世紀以後の交易

Quanchi & Adams 1993より

なぜポリネシア、ミクロネシアなのか？

それから、一つの問題として挙げられるのが、だいたいビーチコーマーはポリネシアとミクロネシアで活躍していましたが、メラネシア地域はほとんど事例がないということです。メラネシアはニューギニア島とその周辺地域となりますが、メラネシアでは政治的な範囲は小さくて相互に対立していました。もちろんポリネシア、ミクロネシアでも対立するのですが、メラネシアは対立する単位がもう少し小さくて、例えば同じ島の中でも対立しているというような状況です。そうすると伝統的に異人に対して攻撃的であるという状況があります。実際にメラネシアの島に船が寄ったときに攻撃を受けたというような事例が多いようなので、場所としてはオーストラリアに近いので需要という点ではあってもおかしくないですが、こういうことからメラネシアでは結果としてビーチコーマーが居住しなかったのではないかということが言われています。

ビーチコーマー研究の意義

最後にビーチコーマーを研究する意義についてお話ししておきます。ビーチコーマーの研究はあまりされていません。私も知ったかぶりして今日ここで話していますけれども、本格的な研究はあまりされてないので、こういう研究の意義というのをお話ししておきます。一つは、ビーチコーマーは太平洋地域が西洋と接触するに際して、初期の段階での異文化の仲介者であったという意味があるかなと思います。それからもう1つは、当時の世界史的な状況との関連というのがあり得るかと思います。太平洋地域での交易とか捕鯨、それからガレオン貿易などと関連させて考えることができるだろうということです。

それから、先ほど言いましたけれども、ビーチコーマーが果たした役割ということで考えると、ポリネシア社会の統合が進んだハワイとかタヒチの例があります。王や首長というものが出現して、それがかなり広い地域を統合するようになったということになりますけれども、それが進んだのは西洋社会との接触、特にビーチコーマーが武器とか色々な技術をそこに持ち込んで、それを王や首長が取り入れ、ほかの社会との競合に応用したということが大きいのではないかと言われています。それから、今日は触れる余裕がありませんでしたけれども、一種の新興宗教とでもいうようなものが発生した例もあるようです。セイラー・セクト（Sailor sect）などというものに発展したような事例もあるようです。

最後に文献をいくつか紹介しておきました。以上が私の話になります。最初に写真で示しましたこういうバーの名前になるような、ビーチコーマーという用語が持っている雰囲気というものが多少示せたのではないかなと思っております。私の話は以上です。

質疑応答

フロアA：非常に興味深い話どうもありがとうございました。3点質問があります。1点目はビーチコーマーの出自についてです。お話しの中で最初はマゼランが置き去りにしたスペイン人が、後にイギリス出身と思われる囚人がビーチコーマーになったとありました。その出自はヨーロッパの中でも時代によって違ったのだと思うのですが、どうだったのでしょうか。

これと絡んで2点目、同じ島にいるビーチコーマー間の関係についてです。スペイン出身とイギリス出身と、異なる出自のものが混じっていたのかどうか。

最後に、英語だと思いますがビーチコーマーという言葉が最初に現れた時期と、もともとの意味とどういうものなのか教えていただければと思います。

豊田：最初の質問ですが、シドニーから南太平洋に行ってビーチコーマーになった人たちというのは、主としてイギリス系の人たちだと思います。イギリス系の中にもまた区分があると思いますので、それは私も詳しくないので今日は答えられません。それから、イギリス系以外のほかの出自の人もあるかと思いますが、これについては、私は一次資料にあたっているわけではないので、ここで適当なことを言うわけにはいかないので、ここではお答えできませんとしておきます。

2番目の質問は、ビーチコーマーの中でのほかの出自の人たちとの関わりということになるかと思います。いろいろな事例があるようです。対立のような事例も紹介されていますし、それから実際にわりと細かく書いてある記述というのは本人が書いている記述しかないので、これはそんなに数が多いわけではないです。ですから、一般的な傾向というのはかなり難しいと思いますけれども、1つ事例を示しておきます。ビーチコーマーの中にも対立があったという漠然とした話が伝わって来ています。それから、ずっと長くいる人もいるのですけれども、交易船がわりと移動して寄ったりしますので、そうするともう嫌になっていた場合にその交易船に乗って帰ってしまうという場合もあるようです。それで数の増減というのはあるようです。ですから、活躍の場がなくなるとたぶんオーストラリアに戻っていたのだと思います。そういうことが行われていたのではないかと思います。

それから、最後の質問で、ビーチコーマーという用語についてです。これもいつ頃からこういう言葉が使われるようになったのか、今の時点では私には答えられません。最初の事例というのを紹介しましたけれども、それがビーチコーマーと言って紹介されたというよりは、もちろんあとからビーチコーマーという概念ができて、それの最初の事例はこれだろうということになったと思います。調べてみないと分からないという答えしかできません。申し訳ないです。

フロアB：ビーチコーマーという存在についてなんですが、これはあくまでも西洋の文献の中でのみ存在しているような存在だったのか。あるいは、それはその後、あるいは現在においても何らかの社会集団、あるいは何らかの概念として残ったのでしょうか。また、「タヒチの場合」のなかで、宣教師が居住するようになるとビーチコーマーは少なくなるとありますが、これはつまりヨーロッパ人が組織的に移住してくる中で、もはやビーチコーマーという存在が分からなくなっていったということとして捉えてよろしいのでしょうか。よろしくお願いします。

豊田：あとの質問からお答えします。先程の質問でもお話ししましたが、島に住んでいると時々交易とか捕鯨船の船が来るようになります。それでほかの島に移った人か、もう少し向こうのほうが住みやすそうだとかという評判を聞き入れてほかの島に移ったりとか、あるいはもうオーストラリアに帰るとかということを行っていたので、移動はまあまあ行われていたようです。ですから、その結果として最終的に数が少なくなるということがあったと思います。オーストラリアに戻るとか、あるいはほかの地域に行ってもまた最終的に戻るとかということになって数が少なくなっていたというのだと思います。

それから、現在の社会との継続性でしょうか。これに関してはコミュニティとかそういうことでは、おそらく存在しないと思います。ただ言われていることとして、これははっきり分からなくて、はっきりエビデンスも取れないのですが、出自の点でヨーロッパ系の人たちが入って混血となって生まれた子どもの数が結構あるのではないかということです。このへんは本当にエビデンスをとるのが難しいのですけれども、島によってヨーロッパ系の顔立ちの人が多い地域があるというようなことが言われています。ある程度そういうことでは現在の生活、現在の社会まで影響を与えているのではないかということが、あまり証拠を示して言えるようなことではないのですが、言われています。とりあえず今のような答えになってしまいます。

参考文献

Bargatzky, T. 1980, ‘Notes and Documents: Beachcombers and Castaways as Innovators’, *The Journal of Pacific History*, 93-102.

Campbell, L. C. 1998, ‘*Gone Native’ in Polynesia: Captivity Narratives and Experiences from the South Pacific*, London.

Craig, Robert D. 2011, *Historical Dictionary of Polynesia*, Third Edition, The Scarecrow Press.

Denoon, Donald et al. (eds.), 1997, *The Cambridge History of the Pacific Islanders*, Cambridge University Press.

Hezel, Francis X., 1978, ‘The role of the beachcomber in the Carolines’, in *The Changing Pacific*, ed. by N. Gunson, Oxford University Press.

Maude, H. E. 1968, *Of Islands and Men: Studies in Pacific History,* New York: Oxford University Press.

Quanchi, M. & R. Adams (eds.), 1993, *Culture Contact in the Pacific*, Cambridge University Press.

Zelenietz, M. & D. Kravits, 1974, ‘Absorption, Trade and Warfare: Beachcombers on Ponape, 1830-1854’, *Ethnohistory* 21(3): 223-249.

近世から近現代にいたる海域世界の社会統合